特集

平和への思いを次世代がつなぐ

家族・交流証言者 松野さんの講話の様子（高島小中学校）

今年は長崎が被爆してから78年。当時の実相を知る被爆者のかたも高齢になり、お話を聞ける機会も年々少なくなっています。

しかし、これからも被爆地長崎は平和の尊さや原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さを次世代に伝え続けていかなければなりません。

被爆者のかたがいなくなった時に備えて何ができるのか。今、どのような活動が行われているのか。

今回の特集では被爆者のかたをはじめ、長崎から日本全国や世界に向けて発信していたり、これからチャレンジしようとしている皆さんをご紹介します。

色んな方法で次世代へつなぐ活動をしているかたが長崎にいます。

被爆者として多くの人に被爆の実相や平和の尊さを伝えるために自身の被爆体験を講話するかた。被爆者のかたと交流し、被爆体験を引き継ぐかた。被爆体験記を朗読し、その体験を語り継ぐかた。8月9日、そして日々の生活で平和や被爆地長崎へ思いを馳せるきっかけ作りに取り組むかたです。

【自分ができることから始める】

その気持ちが大切です。

次世代の子どもたちが平和に暮らしていけるようにする。そのために、まずは一人ひとりができることから取り組んでみませんか？

被爆の実相を語り継ぐ

家族・交流証言者 松野　世菜さん

長崎平和推進協会が行っている「語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）推進事業」で、山脇佳朗（やまわきよしろう）さんの被爆体験を語り継いでいる松野さん。

松野さんが平和活動を何か行いたいと思ったきっかけは、中学3年生の平和学習で行った街頭アンケートでした。

長崎駅前を担当した松野さんのグループは、通行人に8月9日が何の日か尋ねたそう。結果、県外から長崎を訪れていた人のうち7割の人が「何の日か分からない」と回答し、その結果にとても驚いたそうです。

その後、松野さんは何か平和に関わる活動をしたいと思いながら学生生活を過ごし、高校生3年生の時に「家族・交流証言」の交流証言者の募集を知り、さっそく応募。被爆者との交流を経て、英語で被爆体験を伝えていた山脇さんの体験談を引き継ぐことになりました。

山脇さんの被爆体験を自分の言葉で語るために原稿を書いていたとき、行き詰まっていると山脇さんから「私の体験談を全て再現する必要は無い。松野さんの気持ちを伝えて」と言われたそうです。

それから松野さんは証言者として県内外で何件もの講話を行い、その中で山脇さんから伝え方のコツなどさらに多くのことを教えてもらいました。

そんな山脇さんが昨年9月に亡くなり、「聞きたいと思っても、もうお話しすることができません」と寂しそうに松野さんは言います。しかし、山脇さんのご家族から「体験談を引き継いでくれてありがとう」という言葉をもらい、また、自分が講話をするのを真剣に聞いてくれる人や涙を流している人を見て、講話を続けていこうと心に決めていると言います。

松野さんはこれからも、原爆の実相を正しく、そして山脇さんの平和への思いをしっかりと伝えていきたいと話していました。

長崎平和推進協会では、被爆体験を受け継ぎたいかた、自分の体験を託したいかたを募集しています。

詳しくは同協会（☎844・9922）へ問い合わせを。

平和を思うきっかけを届ける

8．9Project 山田 果林さん

代表の山田さんを含め、7人のメンバーで活動する8．9Project。一人でも多くの人が平和への思いを馳せる「きっかけ」を届ける活動を行っています。

このプロジェクトは、被爆の実相や核兵器廃絶などのことを良く知らない人やあまり興味を持っていない人へ、分かりやすく伝えるチャレンジを市が応援する「平和の新しい伝え方応援事業」にも選定されています。

その活動の1つは、8月9日11時2分の5分前をLINEでお知らせする8．9Mokutou Reminder（リマインダー）。きっかけは8月9日に県内の防災無線で放送されるサイレンでした。メンバーの1人が「長崎だけでなく、日本や世界中の人たちに長崎の原爆の日を知らせる方法はないか」と考えたことから活動をはじめたそう。

配信は、8月9日の一度のみです。登録者が平和への思いを馳せる「きっかけ」としてあえて、シンプルに作りました。

また、新たに「黙祷（とう）忘れないPASS」という取り組みもスタート。飛行機のチケットをイメージしたPASSは、LINEの登録用二次元コードと、鶴を折るための用紙がセットになっています。「鶴を折るだけではなく、長崎から平和への思いをつなぐ（PASSする）ものとして捉えたい」という思いが込められています。

今後は、PASSを市内の各所に設置したり、デジタルで折り鶴を折ることができるアプリの開発なども検討しているとか。

8．9Projectはこれからも多くの人が平和へ思いを馳せる「きっかけ」を届けていきます。

8．9Mokutou Reminder登録▼

ホームページはこちら▼

朗読で被爆体験を語り継ぐ

永遠の会U-25（アンダー25） 渡邊 紗羽さん

「被爆体験を語り継ぐ 永遠（とわ）の会」は今年度、高校生から25歳を対象にした若者朗読サポーター 永遠の会U-25を新設。その初めてのメンバーの一人として加入した渡邊さんは大学1年生です。

渡邊さんが平和活動をしようと思ったきっかけは、小学校の6年間で行った平和学習でした。中学生では平和部に入り、部員同士で平和について考え、新聞を作ったり、集会を開いたりしながら平和を発信することへの責任感を感じていったそうです。

高校進学後は放送部に入部。顧問の先生から永遠の会の募集を聞き、放送部としての経験も生かせると考えて応募し、加入しました。

渡邊さんは、被爆体験記から被爆者の思いを読み取り、自分が思ったことを思い出しながら朗読をしたいそうです。聞いた人が当時のことを想像し、平和や原爆の恐ろしさなどさまざまな思いを持つきっかけになるような朗読ができるようになりたいと語りました。

永遠の会U-25 岩永 陽美さん

永遠の会U-25のもう一人のメンバーは高校2年生の岩永さん。アナウンスを専門に部活動を行っています。

岩永さんが永遠の会に入ったのは、放送部の顧問の先生から若者朗読サポーターの募集を聞いたことからでした。それに加え、ピースボランティアとして活動している同級生を放送部で取材し、平和活動を自主的に行っている存在を身近に感じていたことも加入への思いを後押ししました。

自分たちが被爆者から直接話を聞ける最後の世代であり、被爆者のかたたちの思いなどを次の世代に伝えていけたらと思っているそうです。

今後は、被爆体験記を書いたかたの気持ちをできるだけ理解し、それをしっかり伝えるために練習していきたいと話していました。

二人は8月26日㊏午後1時30分から長崎原爆資料館で行われる『ナガサキの郵便配達』朗読と音楽で紡ぐ平和への想（おも）い」で朗読を行います。

永遠の会U-25のメンバーを随時募集しています。詳しくは同事務局（☎814・0055）へ問い合わせを。

被爆体験講話者 三瀬 清一朗さん

自身の被爆体験を伝えている三瀬さん。三瀬さんは小学校5年生の時に矢の平町で被爆。家族8人は全員無事でしたが、爆心地から約200メートルに居た、いとことその家族7人が爆死しました。

三瀬さんが講話を始めたきっかけは、平成26年に、国際交流を目的として行われている船旅〝ピースボート〟に参加したことでした。その時に訪れたベネズエラで現地の中学生くらいの子どもたちと交流し、「日本を知っていますか」と尋ねました。その子どもたちは、日本がどこにあるか分からなかったそうです。日本を知らないということは、長崎や広島に原爆が落とされたことも、もちろん知りません。そのことから三瀬さんは「世界にはこのように原爆の恐ろしさを知らない人がたくさんいるに違いない、それは大変なことだ」と思ったそうです。

「被爆者の自分が、原爆や戦争がいかに恐ろしいものかを伝えていかないといけない」と平成27年から講話者として活動を行っています。

原爆投下から78年が経ち、戦争を知らない世代が増えていき、被爆者の平均年齢が85歳を超え、三瀬さん自身も88歳になった今、被爆の実相や戦争の悲惨さを語る被爆者がいなくなる時が心配だと話します。

しかし、そんな中で、家族・交流証言者や「被爆体験を語り継ぐ永遠の会」などさまざまなかたちで被爆者ではない人が、被爆者たちの体験を伝える受け皿を作ってくれていることが大変ありがたいと言っていました。また、若い人たちが平和活動を行ってくれていることもうれしいそうです。三瀬さんの被爆体験を引き継いでくれるかたもいて、今そのかたに引き継ぐ準備もしているそう。

今後、そういった活動をする人に、原爆や戦争の恐ろしさ、平和の尊さ、被爆者の思いをしっかり伝え、次世代につないでいってほしいと話します。

戦争は、人の命が物のように扱われてしまうもの。そんな悲劇を繰り返さないために、お互いの話しを聞き、思いを汲み取るコミュニケーションが大切です。穏やかな日常生活を続けられることが平和、その大切さを伝えていってほしいと話していました。

78年前の8月9日へ思いを馳せる

原爆資料館収蔵資料展

昨年度に市民の皆さんなどから寄贈いただいた被爆資料を中心に約90点を展示しています。
原爆資料館に足を運び、原爆が投下された「あの日」に思いを馳せてみませんか。

【期間】来年1月31日㈬まで
【場所】長崎原爆資料館 企画展示室
【費用】企画展のみ入場無料（常設展は有料）
【時間】午前8時30分～午後6時30分
※9月以降は午後5時30分閉館

展示資料をご紹介【釘山定則さんの勲八等瑞宝章（勲記）】

1945年当時、釘山鉄夫さん（当時56歳）は浜口町に妻と子ども6人と暮らしていました。子どもたちのうち、悦子さんは三菱長崎兵器製作所浜口製作所、恵美子さんは三菱長崎兵器製作所浜口寮、定則さんは三菱長崎兵器製作所で働いていました。1945年8月9日、子どもたちは原子爆弾によって爆死。鉄夫さん以外の家族が亡くなり、ご本人も原爆症によって1949年に亡くなりました。この資料は戦後、三菱長崎兵器製作所で軍属として勤務中に亡くなった子どもたち3人に贈られた勲八等瑞宝章（勲記）です。鉄夫さん一家に残されたものは一切なく、親族の証言とこの勲記のみが唯一、鉄夫さん一家を物語るものとなっています。

寄贈：釘山 壽美子さん